



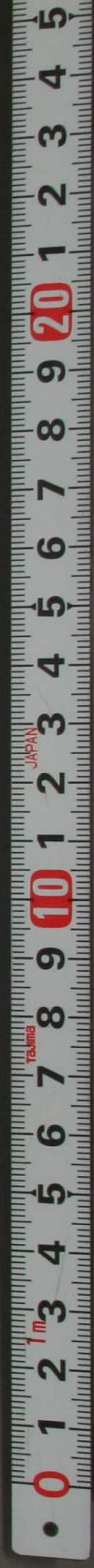
并書
高使
為傳



築
壹
集

式

13
3157
2



3157
2

常五
開卷驚奇俠客傳第壹集卷之二

東都 曲亭主人編次

第三回 黑夜を照して螢火海濱小導く
明察小誇りと鼠輩恥辱を被け

却説野上吏著演の後門前小立出く。小六九対面を在客們を急とを依小
英直が極と宿所迎客れ。且客房を慮をう。登時母屋小六九も俱極の後方小跟
る。船て客房小赴く程小著演の妻晚稲い毎山服小更々。這所小俵て母屋
小六九対面と哀戚の涙を拭ひ面を遠く他郷小旅宿して父を喪ひ良人小後
是し悼と然と之と正首小舒く勤王慰れ母屋のり小六九も必まきし家主人主
婦の儘丁寧身款待態小且感小且うち歎け。姑小応も得せ度敷系母舟の楫
絶々あどるべの磯衝るく立音と共小久後まの親子のうへを憑そけ。信程小著



東都 曲亭主人編次

演の英直の柩を昇り送り來ぬ轎夫の酒價の錢を取るとて儀興共侶保
 返し遣し却し出居の北の一室を猛可掃帚とし机案二脚を上座の推進とし登る
 考へ柩を這首の移さして屏風とてて亮欄子との餘も三方を隔遠りた前案の中も
 櫛と立香を燒く向の飯の准備をもも整正して誘と母屋と小六九とて弁一立と拜す
 さしめ次小若者演立替を找向ひて合堂の中の念を中に維施未見の兄弟館生る
 尚も霊わ著演が只今報ると聽ね某弱冠の昔も惟兼愛を昔ととて人の危き
 窮を救ふといふも位高く富栄を民の父母ののあるに牛の一毛のを普く人の施す
 未由るも唐名石徒小年と歷て德の非薄とて羞らし小山豈のん和殿知られてその
 妻と子を託せるも酒空翰と以し未亡の人母屋のあるに異姓の兄弟の義をとせ
 せる因に竊小推量るも紙中の一字も写されるも十方言のもは優で人を知らるも
 意味深くあれば唐山の常言の女子の已と知るの為に勉て貌を男子の已と知るのの

六日已前ののりければ首級今も有那濱邊小とあるも今宵那首小潜ひも
 志然繼ひて做るもあるといふも掩障より是の所行は志あるもといふも假名川のある
 東つ轎夫們の同試鎌倉路と粗を這首と距るも遠くもあるも鳥夜をも迷ん
 鳴呼介るとし肚裏の決めの快也甲夜の程外見ありて便り宜しといふも且し
 時を程を既に人定母屋の疲勞れ熱腫もあり上の間の主人の妻の咳は
 早に穿えけり小六九の折をとり横撞遣る身と知り枕邊の措るも小刀を合まて踏
 踏へ燈火をち滅しとし掃拂りも潜ひも縁頼る遺戸の未と半開て庭口の後
 門のと不赴く奴婢們の甲夜の遠く分れて忘れん事いふと角門の鎖を開きてありけ
 けれ密と推開て五月の天の輝を降りといふも定めるも如法開夜の地をありけ

御向の心當の鎌倉を殺して急げども人家離れて田畔の岐道さふりたれか去向の右
 欽左衛門と云ひ難の侍在るせん術もたれり。其最陰より忽然と許三郎の螢群飛て小
 六九の身邊来り路を照り先を進て這身の為の御導を倣せ候と云て奇き車
 嵐が夜学の燈火の自初めたる故更に入作ふと自然なる此は童子の忠孝を神明佛
 陀の相憐にて憐る冥助も賜ふ小六九今この奇特の感謝は此も御身は螢の進む
 従ひて只音小まする程の今の坂東路一里十五六里中及び及び此果と由比の濱の
 本あけりの時迄の許三郎の常の四下を去る處と有る限る昭せしか小六九の悦勝
 志六九の四下を去る小義隆主後六個の首級も梟て小塘隈の上在り浅き池の傍も
 わねど猶豫せば遂成卒小知られやまると思ふる小傍の樗樹の枝小推かりて走り降る
 又よく視る小主従の姓名の掛る牌云云と紛れあへるもあはれが今初て死顔なる
 実の父と云神る小身の知りたれも自然と備る孝子の忠勇義隆の首級代扛

抱に樹下へそが伏せ降る。後り程は這濱る。苦屋夜と成ゆと見們の件
 御首の駭覚けん癖者ありと呼て垂るは戸拂ふかぞ突ひりり西云々多れ捧引
 提々走のしむ信と云へ浦風和る夏の夜の四下小群飛る百子の螢火の光りの薪旗は
 鎌倉山の名を星月夜より鮮明と云へ今宵の一奇事ある怪む下一個の童子が
 義隆の首級を奪ふ。走去んと云へ他逃まると呼て先を進て一個のを見合はる
 棒と振閃しく敷も倒さんとて走り鬼も小六九の快足と云へ脱がると云へ左の小首
 級と取る。右の小刀を引抜たて受流し砍拂ひ。防戦の程もあはれ跡も進む。兩
 個のを見合は左右一捕籠て競ひ鬼も勢ひあはれ。怯まぬ小六九勇敵と云へ。才の
 小腕小柱ぬぐもあはれ。最も危くをえりける。浩処は一個の武士の夜行衣着衣は
 ほか小塘隈の茂陰より頭れか。合はる。潜行。藪灯を投棄する。走鬼は小六九の左若
 較むと進む。一個のを見合は。項髪捕り引着。口を飛く。磯と踏。踏られ。見合は。



たまごをたぐりや
ちのたまごころも
由比濱小六奪首級
其のちとゆく

小六

大正八年四月一日

五

三三三三三



善為普提也
法海

有像第四

大正八年四月一日

三三三三三

行半やろ濱邊の石は膝と打て吐嗟とから叫びもあまれければ程もあまれば又一人の利
 てと捕て引遠らく肩引掛て投るに面許怪痛で己が命を捍棒おて願拂台
 苦と叫ぶ声は汀渚の友衛交る俵の仰及て沙石を塗れて挿れら先を進す一個の乞
 見の今の緯の光景は駭怕れ度と英ひて逃んとせよと小六九の語りと透き跟入て内
 りつる刃の冴れと見り首を敷き落され軀の後倒れる俵り程の件の武士も投
 悩まれ兩個の乞見の苦痛を必身と起し組んと進む件の武士も又推隔左存
 兩個の首捉禁して探返復投居て推累くは背の上の膝折布で動きを止むひ
 ねた援とある小六九の乞見と走りよりんととける件の武士も抗て這首管の
 ぞん快あはれと推禁めする好意の一言主と誰とあり浪の寄せと返さ直沙路
 跡を埋めて欬ひと述る間に磯松原の樹の際立潛れ故来一方へかまら早月の雨催ひ
 有はる堂つんをききると雲の絶間を渡る星の路の宿跡を映りける景を乘り急ぎ

処小若演の走りき便室より走來りて小六九を許允と名を置き東西のひたひたに
 件の小瓶を各々身と儲ふとひたし不寄せ那袂の被り隨に推果を各々肩小
 引掛て走りき便室を退りける當下母屋の浄を多そ衣の結り縁頼より來り障子の
 裡面へ入りて小六九を等着て目今あり緯の趣并昨夜見夢を為体と其示して
 憶ふ六箇の小瓶を飲れりまの翁が俺父の為不竊隠する右ゆゑ主後の首級をそ
 ろのらめ俺身も亦豫よりその計校ありぬぞ不知案内のそ夜初迷ひをををを
 とく事の後悔しきとるりして同室あり正し不知よりさあへとの母屋とらち
 空で胆を洗らし且感且沈吟と四下をさぐる今ふたぬ野上の主の恩義の則神佛の加
 護利益も掎りて威徳をなされも賢く這方より同の要をたふるも又折の
 ありんか何れも心秘し那方より任々と報する且等すをわれ外へを渡らんと
 密にせよと教言の惺惚をそその言の葉の敏くも身と掩す夏の日陰の夏を快

はあちをきく。小枝の露後共侶の妻時袖を濡け。然而早飯を果し比著
 演の又少く来る母屋と小六丸を對ひて。さうの亡骸を迎へ。棺槨の準備を
 たれ既しと整え。因ては黄昏の安葬の儀を。墓所の則ち香華院の
 遊行寺に。最近の。小六丸の墓の供ふ立。勿論之為の喪服の準備を。然
 然と。さうの華美を盡して。外見と。上とせん。掩好き。所の。棺の厚と。寸と
 い。さうの時の制度。曲礼の詳。姫周の時の。寸の。後世の。寸弱。我部亦
 往古の。士庶人の。墓碑。後世の。士庶人の。墓碑。後世の。士庶人の。墓碑。
 勅して。人工の。費を。身より。人の。土より。生かす。又土の。帰らぬ。墓の。朽ちる。速朽の。戒
 の。と。さう。然れ。今の。世の。生れ。古の。返らぬ。難。俗の。宜し。後。さう。斟酌。志。死
 の。と。さう。母屋。小六丸。耳。傾け。感服。と。苟且。さう。外。艱。資。助。徳。義。を。仰ぐ
 の。と。さう。冥。と。さう。と。さう。外。の。然。程。藤。澤。南。郷。の。里。人。們。を。福。良。長

者の親族の旅宿の病身より。柩を迎へて遊行寺。今宵安葬を。と。傳。さう。
 咱の。送。り。他。亦。吊。送。り。さう。の。儀。の。黄。昏。の。取。茶。の。一。千。餘。人。の。及。び。さう。著
 演。の。家。の。門。前。と。陸。續。と。と。間。あ。る。人。の。山。做。海。做。と。親。を。街。頭。の。立。ち。又
 施。主。の。名。の。御。士。の。あ。れ。寺。僧。の。准。備。等。困。る。衆。人。送。り。と。寺。内。の。到。り。
 棺。と。本。堂。の。扛。居。を。衆。徒。佛。前。の。進。列。に。追。薦。の。讀。經。了。寧。を。住。持。の。引。導。偈
 句。果。と。棺。を。穿。下。と。さう。小。六。丸。相。隨。以。て。初。と。墓。堂。の。由。り。さう。著。演。が。又。別。の。穿。せ
 たる。穿。の。其。外。の。日。役。僕。們。の。持。束。と。さう。小。瓶。の。小。瓶。此。彼。一。所。の。瘞。め。と。さう。道
 人。們。の。指。揮。と。且。さ。一。箇。の。穿。の。正。面。下。さ。さう。と。義。隆。の。首。級。の。一。却。又。送。れ
 五。箇。の。小。瓶。の。左。右。を。埋。め。此。は。是。回。の。も。船。田。鳥。山。高。柵。堀。口。江。田。の。五
 從。臣。の。首。級。を。と。猜。せ。る。當。下。著。演。を。茶。鬼。の。寺。僧。と。從。ひ。束。と。さう。人。們。を。さ
 ず。這。瓶。を。飲。め。の。掩。年。八。才。を。取。り。春。の。比。初。と。目。せ。日。の。五。十。の。近。所。昨

伊勢傳第一輯卷二

今も七年来用敗したる先筆をそのれ若く資をなれと曲做中文字を寫せ
 檢遣筆葉ののめりぬ。其のいひけれの藏の置を酒今宵の便算の任してあふ
 塚を造らんとすの所為のきん。唐の僧懷素のその年来の敗筆を瘞を瘞を瘞
 一筆塚といふ。載る唐国史補のあり。任れは是筆塚といふもの。其舊より要
 下やと説示其道俗有一感佩と。舊筆を疎きて新筆を親し。利の三走今
 敗る筆も葉のりて本とされぬ心標の有るごとくをみえと連り稱へ己ありし小六
 九の秘策を知れ痛痛くあふのる人の及ぶ著演の陰徳情義の感激と今も
 後折るは是の恩恵を復さざり人の子と生れる申斐あつたとをいける既
 英直の棺も這時莖果つ。吊送の衆人の先立ちて退るもの。後れて友を俟
 小六九の著演も又俱せられて更彌比野上の宿所へ還りける。是よりして小六九の母
 親と共に侶の喪み筆居る一室を出るの過七々々の遊行寺の詣りも著演

亦勢を廢して兄弟の忌服を受たり。這時藤白柵九郎安同の鎌倉の宅地を賜り家
 作落成の日をそがと。程後せんといふもの。いふに幾日ものれが妻子の氣智の宿所
 其の身の管領の館舎を出仕と。稍九日と歴る程の奮由比の濱の鼻の脇屋
 義隆主役の首級の第六日及び夜一箇も送らぬ紛失を。由縁のれ埋めを竊
 取る飲との風声あり。安同のれをちりて。肚裏の事。件の義隆主役の倫忠節の
 取らぬ。捕らぬ。まわらせるとの首故多紛失と人の批評も愉快に察するもの
 倫見の竊小新田首級奴奴然と。那歎當る。智術のりて犯人の擧捕らぬ
 程の人の之報る。當國藤澤南御の御士。野上史著演と喚做するもの。他を名
 たは使者の。臺本陣殺の觸腰一萬級を購集せ。其のりて。其のりて。其のりて
 生平の好く財を散して里人の貧窮を救ふもの。大父の新田義貞の役にて兵糧

つまじく義貞討れて世に憤り職を辞退隠て鎌倉殿義貞出仕せむ。その子孫相ついで續て今の著演に至る。其最傲慢たるの義貞。先代頼朝の時より由緒ある。其後
 多きと斧鉞を加えられざる。この誼も推量し不腸屋義隆主後の首級を竊取する。
 那著演の所為の事。敲る虚実を知らず。属路を類れ安同の執事大々云
 り。退給尋思と做す。俺の職の首級盗賊の著演を。その沙汰ね
 承侍の訴へ。然る時且過き他人の功を奪れて後悔其処ならず。ん
 所詮他が宿所不到之威も。權を實と吐く。折矢庭前捕捕て鎌倉牽りて
 是則俺の功の職分を奪り。亦何人非と云。呼介と。肚裏計較既小
 決りければ。次の日氣賀へ休息の暇。妾時稟請て十四五名の後者。前後立馬と
 直氣加賀へ。のり。且藤澤の御所赴き著演の宿所呼門せ。鎌倉殿
 御内人藤白柳九郎安同。同試を。て。あつ。度向。主人の

と。そのける。且著演の老僕某甲と答。偶光臨のよと。未るといへ。と
 著演の。兄弟の喪の筆り。日。あ。れ。已。と。辞。なり。
 日見参入。の。い。り。と。果。女。同。の。眼。と。睜。り。声。寺。立。と。亦。自由。の
 至。の。終。喪。中。在。の。俺。私。の。事。を。鎌。倉。殿。の。御。用。多。く。出。づ。會。さ。る。と。あ。る。
 異。議。及。び。推。薦。の。項。髪。梳。て。牽。出。さ。ん。然。也。の。あ。る。辞。ま。り。と。敦。團。圓。茶。の。四。言。懲
 其。老。僕。の。怕。れ。退。給。却。著。演。の。信。々。と。あ。つ。る。随。報。一。が。著。演。阿。谷。の。氣。色。も
 考。ら。ん。且。客。房。へ。案。内。と。し。茶。を。薦。め。俺。今。出。づ。對。面。と。い。ふ。老。僕。も
 あり。形。の。ど。く。の。欺。待。せ。安。同。の。さ。も。と。の。い。え。る。客。房。の。上。座。小。坐。を。と。り。
 著。演。が。出。づ。考。ら。ん。今。然。と。僕。程。の。著。演。の。凶。服。の。飾。り。を。立。出。づ。寒
 暖。と。舒。来。意。を。問。へ。安。同。の。究。音。を。後。者。四。五。名。後。方。を。と。り。權。威。と。い。ふ。声
 高。か。俺。發。向。別。談。の。南。方。の。落。人。を。脇。屋。義。隆。主。後。六。名。前。月。廿。四。日。の

よ。そと。夜底倉を誅せられ。首級を由比の濱に梟られ。第六日及び夜その首送を紛
 失のほまある。考は和殿の虚名と好ま。敵自方の差別ゆる。年来彼此を陣取
 り。鞆體を集めてこれを花。且私恩を施し。故を人。東西を取。世の身と共。父祖
 三垂職を辞。御士と倡へ。官府を蔑。如せ。加之祖父著佐。新田義貞。従。懸
 微力を書。と。舊縁。今。忘。武家。臣。を。羞。忌。憚。ら。進。止。既。し。隠。れ
 る。や。御。聆。不。達。う。あれ。を。以。推。ま。た。那。義。隆。主。従。の。首。級。を。當。夜。竊。取。り。花。す。る
 飲。隱。せ。飲。疑。ひ。和。殿。の。あり。討。ま。向。ら。る。り。前。代。鎌。倉。の。幕。下。以。降。由。緒。の
 御。士。の。も。と。を。その。水。沙。汰。及。れ。ど。御。留。義。隆。主。従。を。討。捕。て。せ。る。安。同。を。擇
 出。され。則。密。使。不。立。ら。れ。て。穿。鑿。を。為。ま。る。え。彼。盜。賊。の。外。の。世。評。和。殿。の。極。の。家。を
 陳。れ。が。と。免。され。逆。徒。の。首。級。を。隱。せ。是。則。逆。罪。の。兵。們。を。著。演。不。索。を。被
 と。呼。ま。後。者。們。の。阿。乞。乞。寄。ん。守。著。演。不。索。を。被。佐。と。睨。へ。人。人。疎。忽。ま。る。

其何等の罪ある。且のよと。林の安同のち對ひ。趣その意。何
 證據。那首級を隱せ。其の所為。と。壁。義隆主従の首級。其が隠せ
 と。今。不。至。り。て。外。の。受。く。彼。盜。賊。の。外。の。世。評。和。殿。の。極。の。家。を
 ら。れ。安。同。性。起。り。噫。悻。々。盜。賊。の。逆。徒。の。首。級。を。竊。り。の。何。の。罪。の。多。う。鳥。許
 る。と。と。敦。圍。け。も。著。演。不。索。を。被。冷。笑。ひ。原。來。御。邊。の。武。門。の。故。実。を。威。を。損
 ん。と。著。知。る。詳。説。示。し。這。方。へ。找。て。大。約。敵。の。大。將。の。首。實。檢。あり。故。実。あり。
 又。その。首。を。軍。門。の。梟。ら。る。日。限。あり。既。不。三。日。過。る。を。或。の。首。級。を。本。國。に。遣。り。或。を
 その。邊。の。寺。に。葬。せ。古。例。を。然。る。よ。南。朝。の。建。武。三。年。夏。五。月。棋。津。所。倭
 河。の。役。の。楠。贈。正。三。位。近。衛。中。將。正。成。卿。一。家。を。盡。し。陣。殺。せ。し。時。等。持。院。尊。氏
 卿。の。沙。汰。と。し。廻。梟。首。三。百。の。後。これ。を。河。内。へ。遣。し。子。正。行。朝。臣。の。贈。り。の。後
 又。南。朝。の。貞。國。元。年。曆。三。年。閏。七。月。二。日。の。戦。新。田。贈。中。納。言。義。貞。負。御。越。前。足



金龍寺
當初上州
金山城内
あり
郡若葉に
あり

羽の槇嶋の田畔に流矢の中や亡ぬべし足利尾張守高經に首級を京師の上
せし尊氏卿の沙汰とて則鼻首首の後又その首級を齋と越路へ遣玉ひし
高經のゆい奉り義貞卿の軀と共首級を同國長崎の驛多羅念寺に奉りて
墓を建松を栽菌阿白道和尚と道師とて當時の法號を源光院とせしむ
けは又その本國上野老の義貞卿の三男左少將義宗朝臣我山紹碩禪師を屈
請とて墓を執行し更法名を金龍寺殿真山良悟大禪定門とせしむ依
金山の城中へ一寺を建立して寺號を金龍寺と呼做した先蹤總てかゝる如く敵と
いへば名將の匹夫ふひとくせらるる事非如匹夫の罪せらるるも鼻首と三首の後亦その
首の有を問われ律由られぬるければ義隆の首級をも鼻首三首の内ありと
紛失の詮説もわらぬ既三首を歴する有を問はるる事又同宗の敵とふとも國
賊ありればこれを鼻首せしむ是を先祖を辱るる事怖る故きけり然れを正日

もて那主後の首級を鼻とて不依小措まの只是有司の急り欲先例を違ひし
俵れは首級を隠せしめを所為ありとせらるる事今に至りて外咎めを被るはあ
とのいふはあつたは穿敷金の上の密説ありて必御邊の臆度不出人誣せし栄
利を謀り似非穿敷金ありしとら猶然る事其鎌倉を召よせて問せしは
謀るは何人の憚り密使を遣首をたすらんや快り音言自移ひて退るる
還りしに異説あり及び共侶の鎌倉へ参上して訟すると虚実を糾き快く返答
られと席を拍膝を找めり問かへたは義理明辨の辱しめらるる安同の黄檗と
敵を啞見の如くそれとをら面被るる眼を睜れと一句も出む怯むと分るる言
笑ひし刀を引提て身起り口功者長談を辯火をて水のひ做るる縁の趣
徳々とせしめあはせし出宗を俟ねし兵們來ると呼立たる席薦障も暴
外面のしとせし著演の送りしを冷笑ひし袖うち拂ふて軀を奥に退りける

天正十一年

古

第四回 陰徳老境小入々奴婢と得たり 陽ト鬪鶏小縁々主僕を倡ふ

程小六九の母親母屋も奥の客房のふ當で。猛小騷一りけは。
訝り々奴婢小向ひより。那藤白安同が密使と唱へ。
その次の間へ出近つ。親子存一竊せ。安同がひつる。
一五二十の詳は知られ。愉快と喜め。後小出りのあま。
ども著演の後々。母子小對ひ。安同が来る。言の便の。
母屋小入々小六九も亦著演小件の。同も果まで已けり。
あの日藤白安同が面を初と認り。敷も。心も。
雙言小主役。久敷。俺小腕をも。救ふも。吹。
同と敷も。老。腕。ひ。る。の。る。ね。い。る。不。死。ま。る。あ。程。あ。ま。具。時。と。俟。あ。不。如。と。思。ひ。く。

録大章
守入道法
義隆の

胸と捺りて母親母屋と共侶小。由。ま。間。窺。る。そ。が。依。奥。へ。退。は。る。童。子。に。
思慮を逞けれ却説三伏の夏過て秋の初風立。より。俟。と。る。英。直。が。卒。矣。
忌と迎へけ。あ。日。野。上。著。演。の。母。屋。小。六。九。と。推。け。遊。行。寺。の。詣。り。丁。寧。小。好。事。と。
執。約。一。衆。徒。小。布。施。と。且。英。直。の。墓。碑。と。建。及。義。隆。主。役。の。首。級。と。瘞。と。所。所。
あ。五。層。の。石。塔。波。を。造。と。羊。毛。阜。塔。の。四。个。字。と。鑄。り。羊。阜。の。二。字。と。義。
隆。の。字。の。半。體。と。有。け。る。と。現。る。の。ま。ぐ。れ。を。曉。ぬ。ら。せ。筆。塚。さ。り。と。思。ひ。け。り。そ。が。
中。小。六。九。の。筆。塚。さ。り。と。知。れ。る。羊。阜。の。二。字。と。の。ま。ぐ。れ。を。悟。る。後。小。至。り。學。問。に。
進。む。隨。意。發。明。と。後。漢。の。蔡。邕。が。昔。日。娥。の。古。碑。小。題。と。る。黃。絹。幼。婦。
外。甥。艾。重。白。の。隱。語。小。類。々。俺。楊。脩。の。才。を。知。り。と。選。と。思。ひ。け。り。是。等。の。後。話。
る。と。吉。又。の。次。第。の。識。を。法。廷。果。と。の。夜。艾。著。演。の。あ。ま。と。晚。稻。小。示。し。
側。小。侍。と。母。屋。と。小。六。九。と。招。近。つ。け。と。杖。の。事。知。ら。る。と。く。俺。們。丈。婦。を。過。

録大章
守入道法
義隆の

せころ とうろこ
 世々くこの年来子ごもひとりあつたればいさ憂へく多し入として後竟に第一の不孝
 と先祖の祀と絶所以の介るふ以て子まもる個義任とてより宿望をなげ成
 きて死するとのふも後安かりあの飲びと知るたの今より小六を養嗣として徳莊園と譲
 ばべし然れがと野上氏を冒して実の親の祀と絶せんとあわらむを綴徳養嗣と
 ともその本姓を錦氏を告ぐ両家とひち合せ野上氏累世の諸霊と神祭せられ
 そと莫大の幸いとの義と兼引ぬぐとの晩縮も共侶お世は人の妻とて子
 るた七去のひととの十稔以来幾遍う側室と薦めゆりお色と好みぬく用ひ
 られぬ術もく心苦くぬひおそくも任品のあふ来まるとの家叔と續せんと
 ある俺仗のう筒これお優るそあらんや俺身過世の罪障もよりやうなく軽
 らげ後安きゆべし必る推辞ぬいとゆられて敬篤く小六九の母の應のおけつるも且
 口と鉗り母屋のこれをちゆりてるよりあは日陰の這見と然もふゆられまると

願ふてのぬがたの洪福でゆれども尚老朽なる中夫婦をねのちの後ともお子達に
 生れぬぬとあはるは又十稔も守りぬても竟おん嗣のるる折ゆるとも
 かも仰お随ひゆると自今尚早るあ且く緩いぬと推辞むを昔有演説あ謙
 退辞譲の人あよるべしあの義の今宵お起して云云とのああむのぬる比俺既錦生の
 柩お對ひて推言するあはる。然とも俺嗣おせるとを敷ひぬ飲けぬと辭せり
 あり怨むれ母屋の困と答難と小六九の然もととぬぬと小六を杖で主人主
 婦お對ひてゆる。尚徳角あやるとを徳の打出の杭お似せんと鳴呼かま
 きてぬれぬるの知らぬはぬれと言うとけは重恩の厚はかうへる身篤れが綴火と燈
 水と汲む奴婢おせられて使うとも素素より願ふ所おゆる況ぬ嗣おせんとあは這身の
 福とあふ何とぞ敷ふ推辞む然お人の子と奉るおと遅延ああるのを五十の
 足とて人の子と養ひぬの早くと且俺們的世の憚りよりさあはと敷お續か名家

瑕瑾あるん母の辞退の故のこゝの果ぬ著演と頭を左右うち掉く。そ
 亦愚意と粗語を。在昔魯國の公冶長の縲紲の中在りける孔子のそ
 教ひぬむ。その罪ありと。その兄の子を以妻せ玉ひとの本文あり。和殿母子世
 憚るも時運のまゝあるのまゝの罪あり。所る小庵親を嗣せざる。然し母の
 義を嫌はむ。目今心と聴まほ。推辞の要あると。連り護る已ざれば。
 母屋のゆゑ小六九も竟脱る。ことほむ。僅かその意の後ひ。著演斜る。既
 介んあけ。小六九の掩嗣。忌園の日の不平。この秋びと表を。既小郷士の
 嗣ある。小六九と咽ぶ。相応。小六九の九と除。館小六といん。そよ
 美人の謙稱。みづろ。小才といへる。才と訓。對へ。却九といへる。の
 義とある。ゆへ。論せ。母屋も小六九も。優劣著演の博學。才の感服
 あり。亦その意の随ひ。却説。その冬著演も。小六が己心の関。比吉日と。益

去。小六と父子の義を結ひ。又親戚と里入。より。生置酒。茶會。七。秋。盡。け。る
 より。著演。小六が。為。師。と。擇。む。文。と。字。一。武。習。を。著。佐。の。時。より。家。の
 藏書の。まら。け。小六と。讀書の。初。より。日。毎。數。千。言。を。唸。誦。す。香。の。義。理。不
 通。達。し。切。瑳。琢。磨。す。螢。雪。の。窓。小。夜。の。深。に。數。の。武。藝。を。亦。世。の。名。高
 上。白。水。武。者。助。金。刺。秀。武。師。より。來。録。倉。小。橋。居。せ。師。と。隨。ひ。の
 餘。水。卷。法。坐。敷。相。撲。の。技。も。也。師。の。就。米。習。得。む。と。の。と。著
 且。母。屋。の。隔。を。相。親。と。妹。の。ご。姉。も。優。て。憑。心。萬。事。の。心。づ。け。られ。母
 屋。も。謙。遜。の。日。々。女。婢。們。と。共。侶。の。立。働。む。と。小。六。亦。實。母。養
 父母の。分別。せ。む。を。用。ひ。孝。と。盡。す。稟。る。因。心。答。ん。と。思。ひ。日。も。あ。る。有
 官。て。あ。る。せ。小。六。が。文。學。武。藝。を。習。ひ。上。達。せ。い。年。を。累。ね。是。より。後。の。事

どの所へもその識とての間話休題現陰徳と陽報あり積善の家餘慶多し
 わるむその次の年の春より晩稲の月水とて漸々小身ありくるり冬小至りく安ら
 ぐ小男兒を産けり時小若嶺の五十歳晩稲の四十二歳の初産する小恙もなく母
 子さへ快肥立く乳も亦匱乏のげりけり園宅の換ひのべうものも備せり
 此稱へる年来作善陰徳の報いさるといぬもさき當時の奇談ありあり然
 五十日百日の産室養ひ果比母屋を小六と商量して有一日野上夫婦あり
 徳小六と養嗣せんと宣せ折辞ひさるる世小六の子を奉る小遅延あり速た
 むれは姑く等せぬひひとせしけり小六の及ぬ善根と年来植せぬ
 功德甚多り八十廿萬の神の恵ませぬんぬりける男兒を安ら小奉る小遅延
 又小六の家督を嗣め小六の願ふ小六と初のぞ復性口おへさうと母子は
 心を休らぬ奴家か心ひさるあつて小六も只願願ひたりとて著演せぬ

声とあり立ちそち又沙汰の限りは俺年五十の及び今小六より産する子の成長を
 不慮餘命あつた縁命の長くとそれ迄死るるありとも既小六を養へる小
 六小六譲んと約束せしと變易く今何人か與ふべし生れ赤子にてもあつた小
 六が弟を産せり成長の家僕と家定の次助められんもの因てその乳名を奴
 婢之助と喚べるといひければと告げし事情を知らぬる人西女を産むと
 園の晩稲の月水とて慰め給ふ惣算の理りへ過世して嗣る人の子を養へる
 氣を引く遊遊小子を生むものありとの世話とありは是れ小六の據ある
 倘果とて介らんゆゑ小六を養嗣せしより這見の生れりけんを然とめり
 易く小六を今ゆり又義任せられん俗小六の眼見の水の上る泡小六とて
 このこ 這見かよも育ん彼も亦料りぬる久後けり憑心する悔りたるも
 云云と辞とんと俺夫の意ありとてこの著演笑しは彼は母屋に松

晩稲が旬目も俺と同じ。俺心の巖の如し。左ても右ても轉まざる。これらより小六も死
 身詳の傳示して然るに安念を絶せぬ。復たれぬ。必死心をなす。と教言をく。兼引
 解くもあつ。げとを母屋の回を辭ゆる。言兼し。退れ。小六よりと報知ら。廿大人も
 亦母刀自由。箇様々々。宣旨の今。何れせん。ね。と。小六を嗟嘆し。野上氏を
 冒らむとも。身一介の功も。多くて。人の家督を續ん。む。素より願ふ所。な。心
 況。今。養父母。正。実子。あ。の。猶。且。その。意。後。後。室。人。必。奪。い。け。り。
 と。あ。く。福。も。又。是。より。幾。らん。胸。安。く。ぬ。か。れ。ぬ。事。情。を。按。ま。は。目。今。急。不。這
 議。及。び。怨。と。受。く。洪。恩。を。空。に。做。ま。と。あ。り。や。せん。五。年。十。年。俟。と。も。俺。們。が
 這。志。の。果。し。ど。う。は。ら。ゆ。あ。る。を。黙。と。折。を。俟。ん。と。い。ふ。を。母。屋。の。感。嘆。し。親。聊
 志。は。你。の。了。簡。と。し。小。優。ら。る。と。さ。る。然。れ。ど。養。父。母。の。隔。々。疎。累。小。志。あ。る。と
 あり。付。も。を。領。た。く。そ。も。あ。る。ゆ。ゆ。須。弥。より。高。た。恩。人。を。親。小。せ。む。子。あ。る。

むとも。い。う。疎。累。小。志。あ。る。を。致。骨。を。折。り。報。人。と。を。思。ひ。は。れ。そ。の。長。い。あ。る
 安。う。ほ。べ。と。い。ふ。母。屋。と。い。う。感。し。耳。は。果。つ。小。後。と。又。這。一。議。を。い。は。む。と。も
 の。上。の。赤。子。小。心。を。盡。し。介。抱。下。目。も。懈。ら。ぬ。愛。ま。は。る。と。の。大。々。な。を。著。演。の
 屢。林。示。ゆ。總。々。小。六。と。同。う。せ。む。襪。襪。由。縣。布。の。ミ。ホ。く。奴。婢。之。助。と。を。居。つ。け。る。
 然。程。小。母。屋。の。累。小。其。直。の。病。中。死。後。の。苦。勞。患。難。今。の。野。上。の。資。助。は。も。と
 世。渡。り。や。を。似。小。似。し。と。も。然。と。く。人。小。懸。心。り。て。を。れ。胸。苦。し。死。り。た。り。あ。る。を。信。は
 所。以。あ。り。月。毎。積。小。病。不。用。れ。遂。小。病。あ。る。一。六。血。色。由。初。小。似。む。全。身
 い。て。骨。立。た。は。を。小。六。を。憂。ひ。小。以。後。連。小。諫。め。餌。茶。と。薦。先。野。上。夫
 婦。由。幾。遍。と。なく。醫。師。小。せん。と。い。う。病。臥。ま。あ。ら。れ。母。屋。を。辭。ひ。從。つ。て
 獨。心。小。思。ふ。亡。夫。の。送。言。小。郎。君。の。お。ん。年。の。十五。六。お。ち。り。あ。ん。時。お。ん。素。生。を
 告。口。お。お。先。君。より。預。り。三。種。と。遞。与。一。ま。わ。せ。と。い。ふ。折。を

俟つ黙止たりけども。俺身箇様小病まりて。猛小病病病困らむ。このめい
 きぞそが俣小息絶るとありもせ。何人う亦俺身小代せ。粹徳々と郎君小報
 けおらまほののあらんや。然は折の用心ゆを書つけ置小優とる。非如文辭小疎
 とも良人小のこ。趣と識と後悔まふべし。と尋思と々密山々小件の古又の顛
 末を幾日あさるうつけ。重封皮し。英直が送したる三種と共。日ある人小
 のけさる。衣櫃の底小秘藏ゆ。鍵三晋小放さる。知らのたえなかりけ。信
 まで用心あさり。小六が年尚十二。比かりけ。益も立さ。母屋が病着
 初小かわらむ。瘡とあわねども。二日と病臥とさる。又四五年を経け。小六が
 既小十六歳著演が実子奴婢之助の七才小をかりけ。時小永十七年。母屋の
 久き俣も不樂。稍その折。今茲小六殿小亡夫の送言を報
 まわらせんと。思は。去歲より便宜とあらうけ。小六の秘言を。小六が文学

武藝の為。目と師の許。偶可宿所不在。折を左。右も外見。貝
 く。秘吏長談。便をゆ。任は障。果さ。今茲も春過。百及士とさ。そ
 秋深。月あ。る。休題。復表。筆話。新田。左少将。自方。王。景。景。陸。奥。を
 落。の。ひ。と。義。隆。朝。臣。と。立。別。是。越。路。を。投。起。行。は。且。北。國。の。世。を。潛
 ひ。再。時。運。と。掃。と。の。越。後。の。新。田。累。世。の。由。縁。を。地。方。小。且。自。方。王。伯
 父。承。け。從。四。位。下。春。宮。亮。義。顯。朝。臣。の。建。武。元。年。小。任。せ。れ。當。時。越
 後。守。と。り。又。自。方。王。も。南。朝。の。建。德。二。年。小。越。後。守。小。任。せ。れ。後。天。授。三。年。小
 從。四。位。下。左。近。衛。の。少。将。小。任。せ。れ。此。彼。前。後。の。任。固。り。然。也。も。其。舊
 旗。ヲ。引。り。這。美。小。勇。士。と。其。本。ら。更。小。又。義。旗。を。揚。る。上。志。分。あ。り。尋。思。と
 志。越。後。小。赴。て。且。時。を。俣。ひ。現。乱。世。の。沿。習。也。入。念。仁。義。義。疎。れ
 何。人。々。舊。縁。と。免。閑。居。徒。小。年。と。思。ひ。て。幾。作。た。ほ。る。も。なく。刺。自。方。小。心。思。は。の



九一

玉堂印發

錢下菴前開
 鷄示凶吉
 相印と吉

細と死



玉堂印發

今日休

今日休

左方松島

有像第六

ありき。貞方當國不在を存よりを領主上杉憲定の執事長尾景賢に
 報し。景賢、大軍を推寄り攻めし。雲霧時の防戦あり。貞方を
 士卒よりあわねば名ある家臣の戦没。妻子眷屬四落。八散。生死も知らず。撃
 破されて残燼ゆび燃る由あり。然れども貞方主の辛く重圍を脱れ。當國
 弥彦山より登り且く山居る。程小料ら異人。小通。仙書一卷を授
 けられ且隱形五道の内中水火二道の仙術。折傳授せり。是れ貞
 方主の食されども餓せし山に在ると一稔可介。後越後を去り。本國を
 上野の赴。深く潛び。御座せし。応永十年の夏四月下旬。脇屋右少將義
 隆の相摸る。底倉。敷。以下京鎌倉の下知とて。貞方の隱
 宅を嚴小索ねよと。州郡を徇知する。骨相書とせし。又上野。と
 落着き。とて。信濃甲斐。由縁許。或一年或半年。

光陰を送り。其居を討兵を蒐れ。危は屢あり。那仙術の奇特。火の値
 火の隠れ水の遇。水に隠れ。虎口を脱。是れ後宿所を定め。東八ヶ国を偏歴
 考る。會秘旨の恥。雪ゆんと欲す。是時。後。忠義の志。程ら
 けり。譜第恩顧の勇臣。畑六郎二時種。あり。他。新田四天王。隨一人。と
 える。畑六郎左衛門尉時能。孫をの武藝勇。敢。大父時能。芳。筋力飽
 ま。悍。千鈞の。揚。貞方主と共。危難を脱
 主。影の肢體。正。然。落
 一。千。光陰を。永十七年の。比。千。鎌
 倉の。竊。隠謀の企。世の風声の。彼。貞方
 主。千。下。舊家。千。葛。印。幡。郡。の。領。主。これ
 の。相馬。武。石。大。須。賀。國。分。原。馬。加。等。の。氏。族。今。謀。叛。の。旗。を。揚。

千葉の城小盾籠の朝の落るる且その先代に葉宗胤の俺先大父贈中納言對能に従ひまつて三井寺合戦の折陣没となり宗胤の不知貞胤の北国を落るる自方より先大父の亡のい後心も引返して尊氏に従ひ然れ宗胤の嫡子胤良始終忠義の志挽まむ征西將軍の宮筑紫下向の苑供奉しまつて高守小任せられ肥前國の領たる是等の舊比由縁のあはれ竊那地赴きその為体願世の風声の虚実を知るべ其処便宜なるを然りとて猛可小必起り行救正て立ふくと立出ぬ煙六郎二時種に奴隸の姿打扮て裳を引折脚絆を穿一刀と腰小て行果衆を駈ひ外見を潜る主役入後小立て下総を投て急程の年の漆月の下院小千葉の城下小程遠く福草村を來ぬ畢竟貞方主這頭を過る折又甚麻る話説くあるを次の巻小解分法を聴ねり。



いもの娘

ゆたか

ふか

しげふ

い

依名傳第一輯卷二

卷二

Handwritten text in cursive script, likely a signature or title, possibly reading "依名傳" (Ichi Na Den).

Vertical handwritten text on the left side of the right page, possibly a date or additional notes.



Small handwritten characters at the top of the left page, possibly "依名傳" (Ichi Na Den).

Small handwritten characters on the left page, possibly "依名傳" (Ichi Na Den).

